

元実習生の立場から

臨床化学免疫検査分野における卒前教育と職場での卒後教育との関連

◎鈴木 智明¹⁾
京都鞍馬口医療センター¹⁾

1.はじめに

私達は学生時代どのような気持ちで学んでいたでしょうか？社会人経験を重ねられたベテランの方ほど、記憶が曖昧になられていると思います。私は現在検査技師1年目のため、社会人と学生双方の気持ちが理解できる立場にあり、ベテラン検査技師の方そして学生に改めて知って頂きたい思いで、学生時に学んでおきたかった事、学びにくかった事を私なりにまとめてみました。今後の新人教育や病院実習に役立てて頂ければ幸いです。内容については、私の同期5名で意見を出し合いまとめていますが、多少の偏りが出る点についてはご容赦願います。

2.学校での授業の現状

学校での授業や実習内容は専門学校、大学共に大きな違いは感じられません。3年制専門学校では2年生までに、4年制大学では3年生終了時にはほぼ全ての授業は終了していると聞きます。多少の時期に違いはあるようですが、最終学年の夏頃までを病院での臨地実習や大学での研究活動に費やし、残りの期間を国家試験対策に充てられているようです。

3.病院での臨地実習の現状

学生にとって病院での臨地実習は初めてづくしです。それまで検査室など当然入ったこともありません。私は臨床化学では午前中、採血された検体の運搬や遠心分離等の補助業務、午後からは臨床化学の実習をさせて頂きました。実習中に感じたことは、授業で習った内容が病院では自動分析装置による測定のため、直ぐにはイコールで結びつかない事でした。授業で測定原理は学びましたが、装置の中に試薬も全て入っているため、いつどのような反応で結果を出しているかが解りませんでした。

また、全ての病院で同じ実習を行っているわけではありません。解剖を一度も見学せず病院実習を終えた者や、脳波検査の測定は見学したが実際に電極を付けたことが無い者など個人差がありました。

4.臨地実習中の指導

学生の中には仕事の邪魔をしてはいけないという思いがあり、消極的になる者もいます。学ぶ意欲が無いのでは無く、気を使いすぎている学生もいます。また、実際に働きだしてから役立つことを多く教えて下さい

ましたが、教科書の基本的な内容しか知らず、教えて頂いたことを全て吸収することは出来ない事もありました。そのため現場の検査としてどこが重要かポイントをフォーカスして指導して頂ければ学生は更に理解し易いと考えます。

5.臨地実習での学び方

学生には検査だけでは無く、社会人としての振る舞いも学んで欲しいと思います。社会に出て働くようになれば、様々な人とのコミュニケーションが必要となります。人見知り傾向のある人ほど積極的に挨拶をし、質問をどんどん行って下さい。上司や先輩だけでなく患者様や他部署の人とも話をしていかなければならないのが、社会人であり私たち医療従事者です。

また、学生は国家試験に血眼になりますが、ほとんどの場合国家試験合格直後から検査技師として業務をこなして行く現場に立たされます。実習で行ってはいえると思いますが、例えば細菌検査での培地の塗り方や、血液検査での塗抹標本の作り方など、実際に自分の手で行う作業については環境が許す限り病院実習中に多く経験して下さい。基本的な作業ほど現場の業務で役立つと私は思います。

6.卒後教育について

私は現在、細菌検査室に配属されていますが、学生の間に基本の「き」の字を学んだに過ぎないのだと実感しています。それは、細菌検査においても学生時代に学んだ内容のほとんどは、現場では機械化されているためです。どの部署どの業務にあたるにしても、ベテラン技師の方は1年目の技師へ「やった事あるだろう」という先入観で話を進めず、「やった事はあるのか？」あるいは「やった事無いかも…」を原点にして、接して頂いた方が良く考えます。

〒603-8151

京都府京都市北区小山下総町27番地
独立行政法人 地域医療機能推進機構
京都鞍馬口医療センター 検査部
鈴木智明

075-441-6101